

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
別	ベツ わかれる								王勃詩序
									王勃詩序
									王勃詩序
利	リ きく すどい								王勃詩序
券	ケン わりふ								王勃詩序
									王勃詩序
刻	コク きざむ とき								王勃詩序
									王勃詩序
									王勃詩序
刷	サツ する はく はけ								王勃詩序
									王勃詩序
刺	シ ささる さす しる とげ								王勃詩序
									王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
別												別 現代中国
利												利 西周・利段 現代中国
券												券 干祿(通) 現代中国
刻												刻 現代中国
刷												刷 現代中国
刺												刺 江戸五経(詠) 現代中国

【利】大徐本と段注本で古文の字体が異なる。
 【刻】大徐本に古文がなく段注本で補っている。説文、五経文字、康熙字典の一面目は共に横線。智永千字文の行書、瑠玉集や粘葉本朗詠では3~4画の筆順が現在とは逆。楷書もこのような筆順で書かれていたのかもしれない。智永千字文の行書は偏の最終2画が「冫」の最終2画のように上の方に書かれている。宋元以来俗字譜にもこのような異体字が見える。
 【刺】拓本の五経文字と江戸期の版本の五経文字の字体が異なる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
制	セイ おさえる		制	制	制	制	制	制	制
			制	制	制				
到	トウ いたる	到	到	到	到	到	到	到	到
			到	到	到				
刹	セツ サツ セチ てら		刹	刹	刹	刹	刹	刹	刹
			刹	刹	刹				
削	サク けずる	削	削	削	削	削	削	削	削
			削	削	削				
前	ゼン まえ さき すすむ	前	前	前	前	前	前	前	前
			前	前	前	前	前	前	前
則	ソク すなわち のつとる のり	則	則	則	則	則	則	則	則
			則	則	則	則	則	則	則
			則	則	則				
			則	則	則				
			則	則	則				
			則	則	則				

【制】文部省活字では偏の「ホ」に点がついている。
 【前】もとは「止」と「舟」を合わせた「𠂔」の字体らしい。甲骨には「行(十字路の形)」のついたものもある。睡虎地秦簡には「舟」に「刀」が加わっている。「舟」に「刀」が加わり、「止」が略体になったものが「前」らしい。「止+舟+

刀」の字体にさらに「刀」を加えて「剪」となった。大徐には「剪」の字種で「止+舟+刀」の字体がある。
 【則】説文(大徐本)では「則(貝+刀)」の字体が親字にされていて、漢代以降もその字体が書かれている。ところが権量銘に用いられている字体は「鼎+刀」で大徐本の縮文の字体に

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
制	制	制	制	制			制	制	制	制		制
到	到	到	到	到			到	到	到	到		到
刹	刹	刹					刹					刹
削	削	削	削	削			削	削	削	削		削
前	前	前	前	前			前	前	前	前		前
則	則	則	則	則			則	則	則	則		則

に合致する。段注本では大徐古文2にあたる字体が不録。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
剗	テイ そる								大聖武
劍	ケン つるぎ								王勃詩序
劍	人②								瑠玉集
劔									性霊集
劔									性霊集
剛	ゴウ かたい こわい つよい								金剛場陀羅 尼經
									金剛場陀羅 尼經
									最澄 空海請来目録
									最澄 空海請来目録
劑	ザイ								東大寺獻物帳
劑									空海 三十帖策子
剝	ハク・ホク はかま・とる・ はがれる・は く・はげる・ むく								鄭晉指歸
剝									
剖	ボウ さく わかれる								瑠玉集

【劔】南北朝期より古い使用例がみつからない。二女社『新書源』に異体字の大徐篆文と五経文字が掲載されている。

【劍】「劔・劔・劔・劔・劔・劔・劔・劔」などの異体字がある。説文には「刀部」に分類されているが、五経文字には「刀部」にある。「劔」の部分の現在のように書くようになったの

は中国では宋代、日本では鎌倉時代からのようだ。

【剛】最澄が、旁を「寸」とする字体を書いている。空海も灌頂記でこの字体を書き、後に藤原忠親もこの字体を書いている。これは中国には例のない異体字である。現代中国の字体には偶然かもしれないが古代文字の字体を生かされている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												剗 現代中国
												劍 潘字彙(正体) 現代中国
												劔 宋・大唐三藏 取経詩話
												劔 教員書(正字)
												劔 陸軍(正体) 清・嶺南逸史
												剛 干祿(通) 現代中国
												剛 最澄・空海請来目録
												劑 庭訓往来 現代中国
												剝 現代中国
												剖 現代中国

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劉	リュウ 人①		劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
			劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
			劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
			劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
			劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
			劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
力	リョク リキ ちから つとめる 教1 常①	力	力	力	力	力	力	力	力
		力	力	力	力	力	力	力	力
		力	力	力	力	力	力	力	力
		力	力	力	力	力	力	力	力
		力	力	力	力	力	力	力	力
		力	力	力	力	力	力	力	力
加	カ くわえる くわわる 教4 常①	加	加	加	加	加	加	加	加
		加	加	加	加	加	加	加	加
		加	加	加	加	加	加	加	加
		加	加	加	加	加	加	加	加
		加	加	加	加	加	加	加	加
		加	加	加	加	加	加	加	加
功	コウ く いさお 教4 常①	功	功	功	功	功	功	功	功
		功	功	功	功	功	功	功	功
		功	功	功	功	功	功	功	功
		功	功	功	功	功	功	功	功
		功	功	功	功	功	功	功	功
		功	功	功	功	功	功	功	功
劣	レツ おとる 常①	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣
		劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣	劣

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
劉	劉	劉	劉				劉					劉 刘
		劉										劉
												劉
												劉
												劉
												劉
力	力	力	力	力			力	力	力	力		力
		力										力
												力
												力
												力
												力
加	加	加	加	加			加	加	加	加	加	加
		加										加
												加
												加
												加
												加
功	功	功	功	功	功		功	功	功	功	功	功
		功										功
												功
												功
												功
												功
劣	劣	劣	劣	劣	劣		劣	劣	劣	劣		劣
		劣										劣
												劣
												劣
												劣
												劣

【劉】大徐本と段注本の字体が異なる。大徐本の字体に従った使用例がみつからないが、段注本の字体の、旁の上部を偏の上部に移動させれば、現在使っている字体と合う。
【功】南北朝期は、旁を「刀」とする字体が多数派。これは書聖といわれる王羲之が書いた字体が影響しているのではない

かと密かにもっている。旁を「刀」とする字体を干禄字書は〈通〉としているが、五経文字では〈訛〉と訂正している。